



# 筑紫女学園大学リポジット

Research into the child rearing behavior of mothers 1 : Correlation with methods their mothers

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原田, 博子, HARADA, Hiroko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/190">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/190</a>

# 母親の養育態度に関する研究 I

育てられ方との関連

原 田 博 子

Research into the child rearing behavior of mothers I

Correlation with methods of their mothers

Hiroko HARADA

## 要約

1. 子育て中の母親（本人）の養育態度は「子ども中心的態度」「権威的態度」「親意識」の3つに分類できた。
2. 実母（本人の母親）の養育態度は「子ども中心的態度」「親和的態度」「権威的態度」の3つに分類できた。
3. 本人の母親が「こども中心的態度」だったことによって本人が「子ども中心的態度」をとる傾向があることが明らかになった。
4. 本人の母親が「子ども中心的態度」だったことによって本人の「親意識」が高まる傾向があることが明らかになった。
5. 友達とはなかよくするようにしつけしているという社会的規範，子どものためならどんな苦勞もするという親役割への責任，子どもの教育にお金をかけたいという金銭的価値観，親は子どもの手本になるものだという親としての自覚，口で言ってもわからない時は叩くというしかり方，幼い頃から生の芸術に触れさせたいという文化的価値観が本人の母親の養育態度を通して受け継がれる可能性が示唆された。

## 序 章 問題の所在

### 第1節 本研究の目的

今日、子育てをしている母親の置かれている状況を考えてみると、いくつかの問題点が浮かび上がる。『平成10年度版 厚生白書』<sup>1)</sup>は核家族化，郊外化によって子どもとの接触体験が乏しいまま親になる者も増えてきたこと，戦後の高度経済成長によって，子育ての責任が母親に集中してきたことを指摘しているが，現在においてもその社会状況には変化がなく，このような中で，多くの子育て家庭が子育てに不安を感じ，育児不安を訴える母親，育児ノイローゼに陥る母親も増えてい

る<sup>2)</sup>。また、母親同士の疎外感や社会参加出来ない焦りなども生じている<sup>3)</sup>。

もちろん、母親の置かれている状況を改善しようと行政レベルの援助、民間レベルでの援助なども盛んに行われている。だが、一方現代の子どもたちにおいて、犯罪の低年齢化、犯罪の凶悪化と家庭での子育てのあり方、母親としての関わり方との関連が注目視されてきていることも事実である。

子育て中の母親が自ら他人や関連機関に知識を求めなければ、子どもとの関わり方は、本人が意識する、しないに関わらず自分を育ててくれた母親が手本となるであろう。“大阪レポート”<sup>4)</sup>によると、母親の育児の手本は自分の母親が約26%と一番多く、次いで姉が約11%となっている。

では、その手本である実母のどの部分が子育てをする母親へ伝承するのであるだろうか。また、伝承されない部分はどこなのであるだろうか。

ここが明らかになることによって、家庭内教育の問題、母親の関わり方の問題とされるものの中に含まれる実母から受けた影響に対して、子育て中の母親への再教育の可能性が生れてくる。しかし、今ここで明らかにしたいものは扱う内容の複雑さもあり、莫大なテーマとなりうる。そこで、本研究はその研究の一部として、子育て中の母親（以下、本人と称す）の養育態度と実母（以下、本人の母親と称す）の養育態度との関連をみていくこととする。

## 第2節 先行研究の検討

本人の養育態度に関する研究は数多い。しかし、本人の養育態度と子どもの発達との関連についての研究が多くみられ、本人の養育態度と本人の母親の養育態度との関連についての研究は今のところ見つからなかった。

本研究の目的である本人の養育態度と本人の母親の養育態度について関連した研究に近いものとして、以下の研究がある。

戸田<sup>5)</sup>は祖父、祖母〔本研究では本人の母親にあたる〕の権威的養育スタイル（・言語的かわり・暖かい関わり/理解・自信・理解）と父親本人の権威的養育スタイルの間に中程度の相関があることを見出している。また、祖母の暖かい関わりと父親本人の子ども中心のスタイルにも中程度の相関があることを見出している。

## 第3節 養育態度の定義

『現代保育用語辞典』<sup>6)</sup>によると、養育態度とは親が子どもを育てるにあたって、意図的あるいは無意図的にとる一般態度・行動のこととされる。

本研究ではこの定義に沿いつつ、以下のように養育態度のもつ意味を広げ、広義の養育態度と定義する。

親が子どもを育てるにあたって意図的あるいは無意図的にとる一般態度だけではなく、親としての自覚、子ども中心的な関わり方や権威的な関わり方などを含める。また、親役割での行動、ほめ方やしかり方などを含める。そして、子どもはこう育てたいという価値観、子どもに教えておきた

い社会的規範，子どもに投資する金銭的価値観，子どもに伝えたい文化的価値観などを含めることとする。

## 第1章 調査の概要

### 第1節 調査の対象と方法

#### 1. 調査時期

2004年12月上旬～中旬

#### 2. 調査対象者

3歳以上の子どもを持ち，かつ幼少時代から中学生時代まで実母に育てられた子育て中の母親511名

#### 3. 手続き

福岡県下にある3つの幼稚園に調査依頼をした。

#### 4. 倫理的配慮

調査紙の表紙には，研究目的以外に使用しないこと，個人情報として取り扱わないことを明記し，調査紙は個人が特定できないように無記名にした。返信用封筒は必ず封をしてもらい，クラス担任にも内容がわからないよう配慮した。なお，研究結果を希望する調査対象者にのみ，住所，氏名の記載をお願いした。

#### 5. 配布数および回収率

##### 1) 配布数

表1 配布数および回収数

	配布数	回収数	無回収数
T 幼稚園	298	220	78
K 幼稚園	98	94	4
Y 幼稚園	115	101	14
合計	511	415	96

##### 2) 有効回答数

表2 有効回答数

	有効回答数	無効回答数	回答率
T 幼稚園	218	2	99%
K 幼稚園	91	3	97%
Y 幼稚園	101	0	100%
合計	410	5	99%

各幼稚園にて調査紙を持参し、クラス担任から子どもを通して母親本人に配布した。1週間後、母親本人からクラス担任に手渡してもらった調査紙を回収した。

### 3) 回収率

**表3 回収率**

	回収率
T幼稚園	73.8%
K幼稚園	95.9%
Y幼稚園	87.8%
全体	81.2%

## 第2節 調査項目

調査項目は先行研究を参考にした。また、子ども中心的態度と権威的態度が浮かび上がるように意図し、調査項目を36問作成した。

### 1. 調査紙の得点

「全くそう思わない」を1、「全くそう思う」を6とする6段階の評定尺度を設けて調査紙を作成し、回答を求めた。

分析にあたっては「全くそう思わない」を1、「全くそう思う」を6とする6段階の評定尺度を点数とみなし、因子を構成する各項目の合計得点をその項目数で割り、それを因子得点とした。

なお、本人の母親による育てられ方に関する項目だけが幼少時代から中学校時代にかけてのことを思い出して記入するという想起法をとった。それ以外の項目は現在のことを思うように記入してもらった。

## 第3節 調査対象者の基本属性

### 1. 調査幼稚園の属性

T幼稚園	福岡県F市内H区
K幼稚園	福岡県U郡T町
Y幼稚園	福岡県U郡Y町

## 2. 本人の年齢

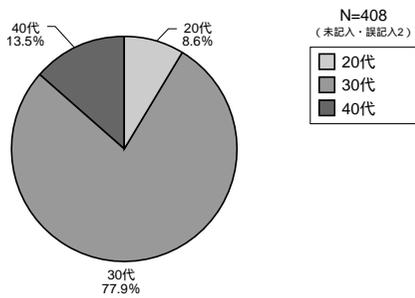


図1 本人の年齢

平均年齢 35.21歳 標準偏差 ±0.30

## 3. 本人の職業

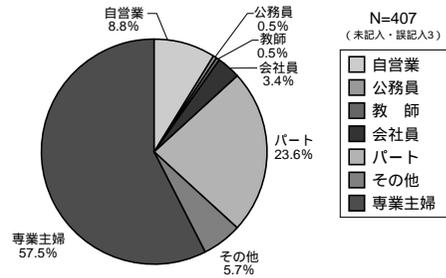


図2 本人の職業

## 4. 本人の子どもの数

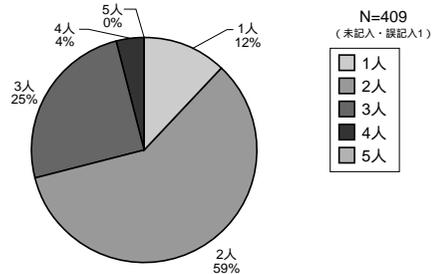


図3 本人の子どもの数

## 5. 本人の母親の年齢

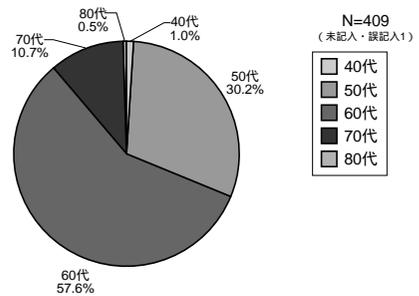


図4 本人の母親の年齢

平均年齢 62.46歳 標準偏差 ±0.30

## 6. 本人の母親の職業

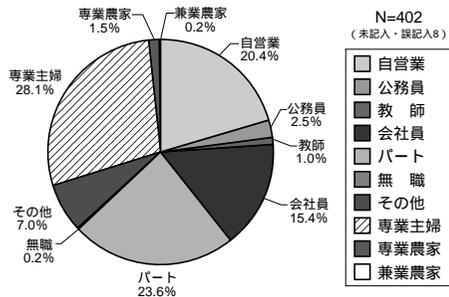


図5 本人の母親の職業

## 第2章 調査結果

### 第1節 本人の養育態度

調査項目のうち18問を使用し、因子分析を行う計画であったが、習い事に関する2問は対概念である可能性があるため、因子分析の項目には含めなかった。したがって、16項目による因子分析を行った。(表4)

#### 1. 因子分析に基づく項目の選定

全項目において、回答の分布に極端な偏りがみられなかったため、「本人の養育態度」に関する16項目について、主因子法 回転のない因子解にて因子分析を行った。その後、初期共通値0.25未満の項目を除外し、主因子法 パリマックス回転による因子分析を行った。その結果、3因子を抽出した。なお、因子負荷量が一つの因子について0.45以上を示す項目を選出した。

#### 2. 因子分析の妥当性

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度は0.743であった。このことにより、調査項目の変数が因子分析で扱う変数として妥当だと示された。

#### 3. 因子の構成項目の内的一貫性

##### 1) クロンバックの $\alpha$ 係数

第1因子の $\alpha$ 係数は0.71、第2因子の $\alpha$ 係数は0.61、第3因子の $\alpha$ 係数は0.61であり、第1因子は内的一貫性が認められたが、第2因子と第3因子は認められなかった。しかし、第2因子と第3因子は因子を構成する項目が2つや3つと少なかったことが原因とも考えられる。第2因子と第3因子において、構成する項目それぞれすべてが、0.5以上の因子負荷量を示しているのでこのまま採用することにした。

#### 4. 因子分析の結果

##### <第1因子>

- ・しかるとき子どもの言い分には十分に耳を傾けている
- ・時間を割いてでも子どもと接する時間を作っている
- ・しかるよりほめるようにしている
- ・子どもの個性をのばすようにしている

以上の4項目において因子負荷量が高くみられた。

子どものために時間を作ったり、子どもの気持ちを大切にしたりと子どもの気持ちまで十分に汲み取っていることから子ども一人ひとりの個性や意志を尊重する関わり方を表しているものとして「**子ども中心的態度**」と命名した。

##### <第2因子>

- ・子どもが泣いてもわかるまで言い聞かせるべきだ
- ・幼い頃のしつけが肝心なのでしつけは厳しくしたほうがいいと思う
- ・親の言いつけは必ず守らせるようにしている

以上の3項目において因子負荷量が高くみられた。

親のとる養育態度のうちで、子どもに対しての厳しさが根底にあり、それを親という立場で表されるものとして「**権威的態度**」と命名した。

<第3因子>

- ・親は子どもの手本になるものだと思う
- ・子どものためならどんな苦勞もするつもりである

以上の2項目において因子負荷量が高くみられた。

親としてあるべき態度や覚悟を表すものとして「**親意識**」と命名した。

表4 本人の養育態度の因子分析

本人の養育態度 項目 \ 因子	第1因子 子ども中心 的態度	第2因子 権威的 態度	第3因子 親意識	共通性
しかるとき子どもの言い分には十分に耳を傾けている	0.71	0.13	0.13	0.54
時間を割いても子どもと接する時間を作っている	0.61	0.05	0.12	0.38
しかるよりほめるようにしている	0.57	-0.11	0.13	0.36
子どもの個性をのばすようにしている	0.47	0.11	0.44	0.43
子どもが泣いてもわかるまで言い聞かせるべきだ	0.10	0.66	-0.01	0.44
幼い頃のしつけが肝心なのでしつけは厳しくした方がいいと思う	-0.13	0.58	0.15	0.38
親の言いつけは必ず守らせるようにしている	0.12	0.53	0.19	0.33
親は子どもの手本になるものだと思う	0.11	0.12	0.75	0.59
子どものためならどんな苦勞もするつもりである	0.31	0.19	0.50	0.38
因子寄与率(%)	17.4	12.7	12.4	
累積寄与率(%)	17.4	30.2	42.5	

## 第2節 本人の母親の養育態度

調査項目のうち18問を使用し、因子分析を行う計画であったが、習い事に関する2問は対概念である可能性があるため、因子分析の項目には含めなかった。したがって、16項目による因子分析を行った。(表5)

### 1. 因子分析に基づく項目の選定

項目において、天井効果(平均+標準偏差が尺度の上限値を超える)とフロアー効果(平均-標準偏差が尺度の下限値を超える)がみられたため、該当する2項目を除外し、「本人の母親の養育態度」に関する14項目について、主因子法 回転のない因子解にて因子分析を行った。その後、初期共通値0.25未満の項目を除外し、主因子法 バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、3因子を抽出した。なお、因子負荷量が一つの因子について0.45以上を示す項目を選出した。

## 2．因子分析の妥当性

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度は0.765であった。

このことにより、調査項目の変数が因子分析で扱う変数として妥当だと示された。

## 3．因子の構成項目の内的一貫性

### 1) クロンバックの $\alpha$ 係数

第1因子の  $\alpha$  係数は0.83, 第2因子の  $\alpha$  係数は0.94, 第3因子の  $\alpha$  係数は0.68であり, 第1因子, 第2因子に内的一貫性が認められた。第3因子は認められなかった。しかし, 第3因子は因子を構成する項目が2つと少なかったことが原因とも考えられる。第3因子において, 構成する項目それぞれすべてが, 0.5以上の因子負荷量を示しているなのでそのまま採用することにした。

## 4．因子分析の結果

### <第1因子>

- ・私の個性を大事にしてくれた
- ・愛情をもって接してくれた
- ・しかるとき私の言い分に耳を傾けてくれた
- ・私のためならどんな苦勞でもしてくれた
- ・思春期においても, 母とは友達に話すようなことも話せる関係だった
- ・教育に充分なお金をかけてくれた

以上の6項目において因子負荷量が高くみられた。

親としてできる限りのことをするという関わり方や子どもの気持ちを十分に汲み取り, 個性や意志を尊重する関わり方を表しているものとして「**子ども中心的態度**」と命名した。

### <第2因子>

- ・親子が一緒に楽しむ機会のひとつとして母はレジャー(キャンプ, プール, 遊園地, 行楽地に行くなど)と捉えていたと思う
- ・子どもの私を楽しませる機会のひとつとして母はレジャー(キャンプ, プール, 遊園地, 行楽地に行くなど)と捉えていたと思う

以上の2項目において因子負荷量が高くみられた。

親のとする養育態度のうちで, 子どもに対しての親しみ, 愛情が根底にあり, それを親という立場で表されるものとして「**親和的態度**」と命名した。

### <第3因子>

- ・母には逆らえなかった
- ・しつけは厳しかった

以上の2項目において因子負荷量が高くみられた。

親のとする態度のうちで, 子どもに対しての厳しさが根底にあり, それを親という立場で表される

ものとして「権威的態度」と命名した。

表5 本人の母親の養育態度についての因子分析

本人の母親の養育態度 項目 \ 因子	第1因子 子ども中心 的態度	第2因子 親和的 態度	第3因子 権威的態度	共通性
私の個性を大事にしてくれた	0.79	0.09	-0.12	0.65
愛情をもって接してくれた	0.77	0.16	0.04	0.62
しかるとき私の言い分に耳を傾けてくれた	0.72	0.18	-0.24	0.60
私のためならどんな苦労もしてくれた	0.69	0.10	0.18	0.52
思春期においても、母とは友達に話さうなことも話せる関係だった	0.57	0.16	0.01	0.36
教育に充分なお金をかけてくれた	0.47	0.24	0.21	0.32
子どもの私を楽しませる機会のひとつとして母はレジャーを捉えていたと思う	0.28	0.91	0.13	0.93
親子が一緒に楽しむ機会のひとつとして母はレジャーを捉えていたと思う	0.22	0.89	0.15	0.86
しつけには厳しかった	0.07	0.08	0.85	0.74
母には逆らえなかった	-0.05	0.11	0.58	0.35
因子寄与率 (%)	28.8	18.1	12.6	
累積寄与率 (%)	28.8	46.9	59.5	

### 第3章 調査結果の考察

#### 第1節 本人の養育態度と本人の母親の養育態度との関連

##### 1. 因子分析で得られた本人の養育態度と本人の母親の養育態度との関連

因子分析で得られた本人の養育態度「子ども中心的態度」「権威的態度」「親意識」と本人の母親の養育態度「子ども中心的態度」「親和的態度」「権威的態度」について相関関係を分析した。

##### 1) 本人の「子ども中心的態度」について

本人の母親の「子ども中心的態度」とは相関係数0.24で弱い相関関係がみられた ( $P < 0.01$ )。

本人の母親の「親和的態度」とは相関係数0.14で極弱い相関関係がみられた ( $P < 0.05$ )。

本人の母親の「権威的態度」とは相関係数0.16で極弱い相関関係がみられた ( $P < 0.01$ )。

このことから、本人の「子ども中心的態度」は本人の母親の「子ども中心的態度」が弱く影響し、「親和的態度」と「権威的態度」が極弱く影響していると言える。

##### 2) 本人の「権威的態度」について

本人の母親の「子ども中心的態度」とは相関係数0.12で極弱い相関関係がみられた ( $P < 0.05$ )。

本人の母親の「親和的態度」とは有意差がなく、相関はなかった。

本人の母親の「権威的態度」とは相関係数0.17で極弱い相関関係がみられた ( $P < 0.01$ )。

このことから、本人の「権威的態度」は本人の母親の「親和的態度」とは相関がなく、本人の母親の「子ども中心的態度」「権威的態度」が極弱く影響していると言える。

### 3) 本人の「親意識」について

本人の母親の「子ども中心的態度」とは相関係数0.26で弱い相関関係がみられた ( $P < 0.01$ )。

本人の母親の「親和的態度」とは相関係数0.10で極弱い相関関係がみられた ( $P < 0.05$ )。

本人の母親の「権威的態度」とは相関係数0.16で極弱い相関関係がみられた ( $P < 0.01$ )。

このことから、本人の「親意識」は本人の母親の「子ども中心的態度」が弱く影響し、「親和的態度」と「権威的態度」が極弱く影響していると言える。

因子分析で得られた本人の養育態度と本人の母親の養育態度について、予想よりも強い相関がなかった。このことは、因子分析をすることにより強い相関を示すものを集めて因子としたため、各因子同士が独立したように見えることが原因と考えられる。また、因子得点は因子内項目の総計を項目数で割るという算出方法をとったので、特徴的なばらつきを持つ素データが平均化された可能性もある。そこで、以下では本人と本人の母親の養育態度についての質問項目別に相関関係を分析した。

## 2. 質問項目別にみた本人の養育態度と本人の母親の養育態度との関連

本人と本人の母親の養育態度について質問項目別に相関関係を分析した結果を以下のカテゴリーに分けて考察した。

### 1) 社会的規範

‘友達とは仲良くするようにつけしている’という本人の養育態度と‘友達とは仲良くするようにならなければならない’という本人の母親の養育態度は相関係数0.42と中程度の相関がみられた ( $P < 0.01$ )。このことから、‘友達とは仲良くするようにつけしている’という本人の態度は‘友達とは仲良くするようにならなければならない’という本人の母親の養育態度に影響されていると言える。

### 2) 親役割への責任

‘子どものためならどんな苦勞もするつもりである’という本人の養育態度と‘私のためならどんな苦勞でもしてくれた’という本人の母親の養育態度は相関係数0.30で弱い相関がみられた ( $P < 0.01$ )。このことから、‘子どものためならどんな苦勞もするつもりである’という本人の考え方は‘私のためならどんな苦勞でもしてくれた’という本人の母親の養育態度が弱く影響していると言える。

### 3) 金銭的価値観

‘子どもの教育に充分なお金をかけたい’という本人の養育態度と‘教育に充分なお金をかけてくれた’という本人の母親の養育態度は相関係数0.21で弱い相関がみられた ( $P < 0.01$ )。このことから、子どもの教育に充分なお金をかけたい’という本人の考え方は‘教育に充分なお金をかけてくれた’という本人の母親の養育態度が弱く影響していると言える。

### 4) 親としての自覚

‘親は子どもの手本になるものだ’という本人の養育態度と‘親は子どもの手本になるものだとは母は考えていたように思う’という本人の母親の養育態度は相関係数0.37で弱い相関がみられた ( $P$

<0.01)。このことから、‘親は子どもの手本になるものだ’という本人の考え方と‘親は子どもの手本になるのだと母は考えていたように思う’という本人の母親の考え方が弱く影響していると言える。

#### 5) しかり方ほめ方

‘口で言ってもわからない時は叩くこともある’という本人の養育態度と‘悪いことをしたとき叩かれることがあった’という本人の母親の養育態度は相関係数0.29で弱い相関がみられた( $P < 0.01$ )。このことから、子どもを叩くという本人の態度は‘悪いことをしたとき叩かれることがあった’という本人の母親から受けた経験が弱く影響していると言える。

#### 6) 文化的価値観

‘できるだけ生の芸術に幼い頃から触れさせたいと思う’という本人の養育態度と‘演劇、美術展、博物展など母の趣味に付き合わされるが多かった’という本人の母親の養育態度は相関係数0.24で弱い相関がみられた( $P < 0.01$ )。また、‘できるだけ生の芸術に幼い頃から触れさせたいと思う’という本人の養育態度と‘ミュージカルや展覧会など生の芸術に触れさせようと母はしてくれた’という本人の母親の養育態度は相関係数0.30で弱い相関がみられた( $P < 0.01$ )。このことから、‘できるだけ生の芸術に幼い頃から触れさせたいと思う’という本人の養育態度は‘演劇、美術展、博物展など母の趣味に付き合わされるが多かった’と‘ミュージカルや展覧会など生の芸術に触れさせようと母はしてくれた’という本人の母親の養育態度が弱く影響していると言える。

#### 7) 子どもに対しての親の厳しさや権威的態度

‘幼い頃のしつけが肝心なのでしつけは厳しくした方がいいと思う’という本人の養育態度と‘しつけには厳しかった’という本人の母親の養育態度は相関係数0.19で極弱い相関がみられた( $P < 0.01$ )。このことから、‘幼い頃のしつけが肝心なのでしつけは厳しくした方がいいと思う’という本人の考え方は‘しつけには厳しかった’という本人の母親の権威的態度が極弱く影響していると言える。

‘親の言いつけは必ず守らせるようにしている’という本人の養育態度と‘母には逆らえなかった’という本人の母親の養育態度は相関係数0.16で極弱い相関がみられた( $P < 0.01$ )。このことから、‘親の言いつけは必ず守らせるようにしている’という本人の養育態度は‘母には逆らえなかった’という本人の母親の権威的態度が極弱く影響していると言える。

#### 8) 子どもとの関わり方

‘子どもの個性をのばすようにしている’という本人の養育態度と‘私の個性を大事にしてくれた’という本人の母親の養育態度は相関係数0.10で極弱い相関がみられた( $P < 0.05$ )。このことから、‘子どもの個性をのばすようにしている’という本人の養育態度は‘私の個性を大事にしてくれた’という本人の母親の養育態度が極弱く影響していると言える。

#### 9) 習い事に関しての捉え方

‘習い事で何を習うかは子どもの将来のことを考えて親の思いを優先している’という本人の養

育態度と‘習い事で何を習うかは親が決めた’という本人の母親の養育態度は相関係数0.13極弱い相関がみられた ( $P < 0.05$ )。このことから、‘習い事で何を習うかは子どもの将来のことを考えて親の思いを優先している’という本人の考え方は‘習い事で何を習うかは親が決めた’という本人の母親の養育態度が極弱く影響していると言える。

‘習い事で何を習うかは子どもがやりたいというものを優先させている’という本人の養育態度と‘習い事は自分のやりたいことをさせてもらった’という本人の母親の養育態度は相関係数0.14で極弱い相関がみられた ( $P < 0.05$ )。このことから、‘習い事で何を習うかは子どもがやりたいというものを優先させている’という本人の養育態度は‘習い事は自分のやりたいことをさせてもらった’という本人の母親の養育態度が極弱く影響していると言える。

## 終章 本研究のまとめ

### 第1節 おわりに

本研究で明らかになったことは、強い相関関係はなかったが、子育てをしている母親の養育態度は本人の母親の養育態度を通して、受け継がれるものがあることが示唆された。この結論は女性が母親となったときの養育態度の責任が本人の母親にあるということを意味するものではない。ただ、母親役割のモデルになる可能性が本人の母親にはあり、本人の母親の養育態度は母親の養育態度に影響を及ぼす要因の一つに過ぎないのである。

現代の子育ての問題は幅広い。渡辺<sup>7)</sup>が抱えるような心理的問題も含んだ事例になればなるほど親子関係は複雑になっていくであろう。渡辺は親の未解決の葛藤が知らぬ間に子どもに伝わることを世代間伝達と定義しているが、このような心理的問題を含む事例は個別の解決策が必要であろう。しかし、社会の問題として子育てを見ていく立場をとれば、子育て中の母親がよりよく育児をすることが社会にとっても望ましいことである。よりよく育児をするためには子育て中の母親の行動や態度を十分理解することも必要なことと考える。そういった意味で本研究が役に立つことを願う。

### 第2節 本研究の限界

本研究は母親を対象とした研究であったが、子育ては母親のみが担うもの、また母親のみに責任があるという見地に立ったものではなく、今回は対象を母親に絞ったに過ぎない。

本研究は調査を幼稚園に依頼した関係上、対象となる母親は専業主婦が多く、現代の母親像を表していると言いがたいところに本研究の限界がある。

本研究は本人に本人の母親のことを思い出して書いてもらうという想起法にて本人の母親のことを調査する方法を取った。本人の母親の養育態度として調査したものは本人の幼少時代から中学校時代ごろの本人の記憶である。記憶は時間とともに変化するので本人の母親の養育態度に関しては厳密さにかけてところに本研究の限界がある。

### 第3節 今後の課題

現代の母親の特徴として、子どもを私物化しているとか、親子が友達感覚であるなどと言われている。今回の研究ではそのような養育態度を想定して設問を作ったが、全く表面上には現れなかった。このことは、設問が少なかったことによる可能性がある。今後はこのことを明らかにしていくつもりである。

本研究では親がとる態度のうちで、子どもに対しての厳しさが根底にあり、それを親という立場で表現されるものを権威的態度の定義とした。しかし、船橋<sup>8)</sup>は親が子に対して権力を持つことは両義的であると述べている。本研究の定義に含まれる厳しさの程度が曖昧であった可能性もある。今後は必要以上の厳しさと親として必要な厳しさを明確に分けて考えていく必要がある。

養育態度の形成要因は社会文化的条件（社会階層など）、社会心理的条件（家庭の雰囲気、両親の育児観の一致など）、親の個人的条件（教育水準など）、子どもの個人的条件（性格など）などが絡み合っている<sup>9)</sup>。従って、一面で捉えることは難しいことであろう。今後、様々な角度から見ていく必要がある。

今回の研究では本人の養育態度と本人の母親の養育態度において、強い相関を示すものがなかった。手法上の限界など様々な原因があると思われるが、研究のアプローチとしてインタビューなど質的内容も加えた研究をしていく必要がある。

### 引用文献

- 1) 監修厚生省 1998 『平成10年度版 厚生白書』 PP 84
- 2) 大日向雅美 1988 『母性の研究』 川島書店 PP .119
- 3) 有賀美和子・篠目清美 2004 『親子関係のゆくえ』 勁草書房 PP 6
- 4) 服部祥子・原田正文 1991 『乳幼児の心身発達と環境』 名古屋大学出版会 PP .140～141
- 5) 戸田須恵子 2001 『父親の養育態度に影響する諸要因とその構造』 北海道教育大学紀要 vol 51 PP 33～43
- 6) 岡田正章 他 1997 『現代保育用語辞典』 株式会社フレーベル館 PP 438
- 7) 渡辺久子 2000 『母子臨床と世代間伝達』 金剛出版
- 8) 船橋恵子 他 1992 『母性の社会学』 サイエンス社 PP 32
- 9) 詫摩武俊 1969 『親と子のあいだ』 雷鳥社

### 参考文献

- ・神原文子 他 2000 『教育期の子育てと親子関係』 ミネルヴァ書房
- ・大日向雅美 1988 『母性の研究』 川島書店
- ・有賀美和子 他 2004 『親子関係のゆくえ』 勁草書房
- ・井上健治 他 1997 『子どもの社会的発達』 東京出版会
- ・渡辺秀樹 他 2004 『現代家族の構造と変容』 東京大学出版会